

日本におけるプロト産業化期の地域活性化(3)

—群馬・埼玉両県における公立小学校立地集落の最低活性化—

田村正夫

I. はじめに

II. 最高・最低両活性化集落の比較

- (1) 両活性化集落の分布
- (2) 維新前の所領分布
- (3) 平民・士族の戸数構成
- (4) 雑税額の比較
- (5) 人口移動
- (6) 馬の保有
- (7) 荷車・人力車の保有

III. 最高・最低両活性化に基づく地域区分

- (1) 活性化の両極端——群馬県中央部と北毛地域——
- (2) 東毛～埼玉県北縁地域
- (3) 川越～奥武蔵地域
- (4) 西毛地域

IV. むすび

I. はじめに

日本の社会を巨視的に眺めて、端的に表現すれば、今なお、産業化が進展しつつある社会であるといえよう。そこで、地域変化に視点を絞ると、プロト産業化期¹⁾の地域構造を解明する必要に迫られる。筆者はこのような視角に立って、変革期としての明治初期における全国的趨勢を、公立小学校と授業料及び教員数を指標として検討するとともに、群馬・埼玉両県の地域的特質についても論述した²⁾。さらに、両県における公立小学校立地集落の最高活性化についても論述した³⁾が、本稿では、これと対比して公立小学校立地集落の最低活性化について検討する。

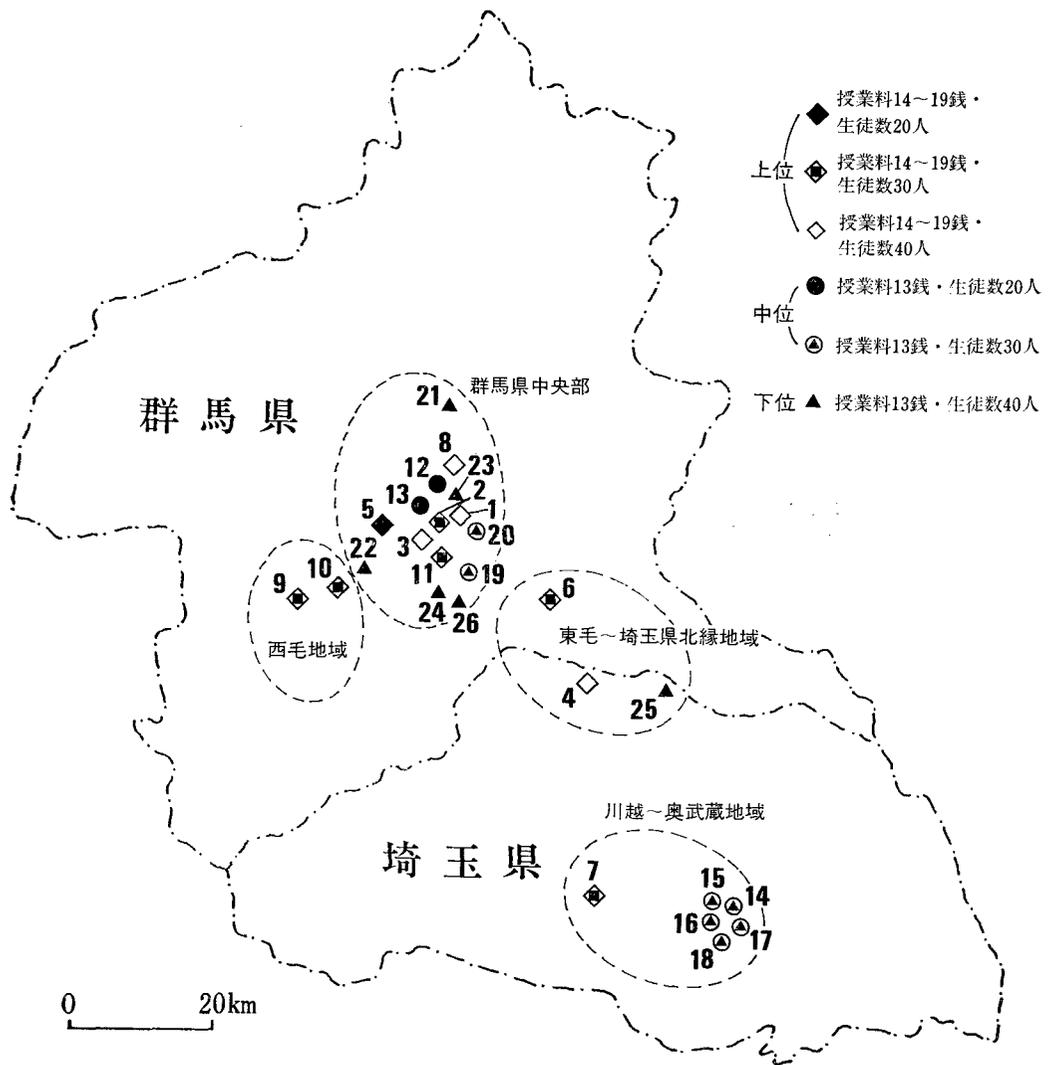
このため、群馬・埼玉両県において、きわめて低い活性化しか示さなかった公立小学校が、いかなる特質をもつ集落に立地していたかを明らかにすることによって、活性化の地域差を生じた要因を解明する。一般的には、生徒1人あたり授業料(月謝)が低額であればあるほど、また教員1人あたりの生徒数が多ければ多いほど、活性化が低かったと解される。そこで、『文部省第2年報』〈明治7年(1874)〉によって、両県における学校ごとのこれらの数字を算出した⁴⁾。そして、生徒1人あたりの授業料が0～3銭であるとともに、教員1人あたりの生徒数が80～190人であるという2つの条件を満たす26校を、最低の活性化を表すものと考えて抽出した。本稿においては、これらの学校が立地する集落の特質を、『皇国地誌』^{5),6)}を使用して考察する。

II. 最高・最低両活性化集落の比較

(1) 両活性化集落の分布

最高活性化集落は、前橋を中心とする群馬県中央部～埼玉県北縁部と、埼玉県川越～越生地区に分布していた。そして前者については、上位の活性化が核心地と拡散的な外側部にみられたが、とくに核心部では、中位の活性化を付随していたのに対し、下位の活性化は、上位の活性化とともに拡散の傾向をみせていた。また後者については、中位の活性化が認められる川越地区と、上位の活性化をみる越生が組み合わせられていた(図1)。

これに対して、最低活性化集落のうち上位の活性化は、群馬県では東毛に卓越するほか、わ



- | | | | | | | |
|---------|---------|--------|---------|--------|---------|---------|
| 1. 前橋 | 2. 前橋 | 3. 前橋 | 4. 内ヶ島 | 5. 東明屋 | 6. 今泉 | 7. 越生 |
| 8. 石井 | 9. 松井田 | 10. 安中 | 11. 前代田 | 12. 横屋 | 13. 上小出 | 14. 川越 |
| 15. 川越 | 16. 川越 | 17. 川越 | 18. 松郷 | 19. 後閑 | 20. 西片貝 | 21. 津久田 |
| 22. 下里見 | 23. 原之郷 | 24. 箱田 | 25. 上須戸 | 26. 下滝 | | |

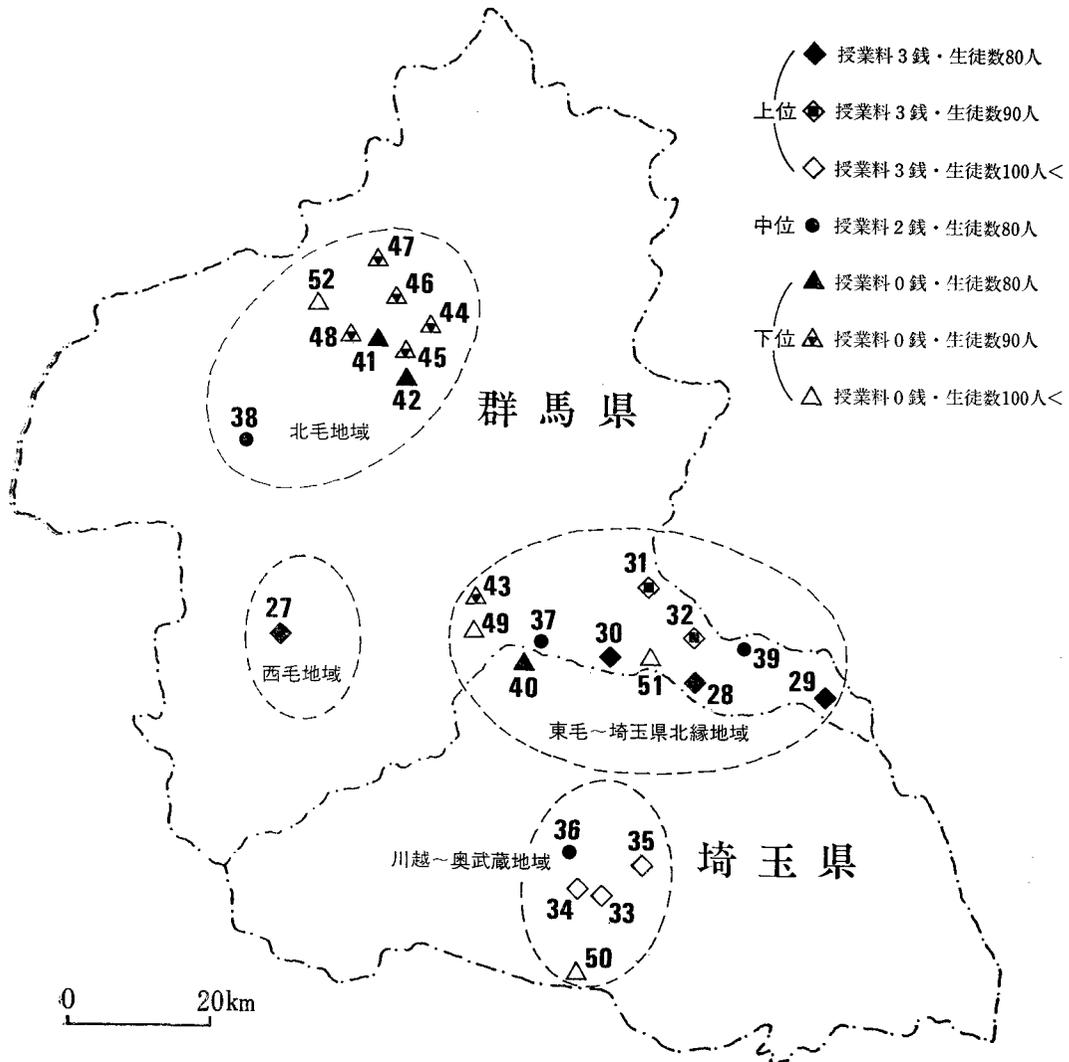
図1 群馬・埼玉両県の公立小学校立地からみた最高活性化集落（明治7年）

注) 授業料は生徒1人あたり月額、銭未満四捨五入、生徒は教員1人あたり、10人未満四捨五入。

資料：図2とも、『文部省第2年報』から算出

ずかに西毛に点在し、埼玉県では奥武蔵に塊状に集中していた。また下位の活性化は、北毛の利根川上流域において顕著に表れるほか、東毛にも認められ、奥武蔵では点在していた。そして中位の活性化は、北毛・東毛・奥武蔵に拡散していた（図2）。

最高活性化集落と最低活性化集落の両者における活性化の動きを比較して概観すると、一般に、前者では活性化の傾向が北高南低であったのに対して、後者では逆に南高北低を示していた。つまり、最高活性化集落については活性化の波が南下していたのに、最低活性化集落では



- | | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|
| 27. 八木連 | 28. 上三林 | 29. 海老瀬 | 30. 堀口 | 31. 吉沢 | 32. 秋妻 | 33. 森戸 |
| 34. 川角 | 35. 高板 | 36. 五明 | 37. 小此木 | 38. 三島 | 39. 足次 | 40. 仁手 |
| 41. 月夜野 | 42. 下川田 | 43. 駒形 | 44. 下発知 | 45. 井土上 | 46. 上牧 | 47. 湯原 |
| 48. 新巻 | 49. 樋越 | 50. 下畑 | 51. 吉田 | 52. 須川 | | |

図2 群馬・埼玉両県の公立小学校校立地からみた最低活性化集落(明治7年)
 注) 授業料は生徒1人あたり月額、銭未満四捨五入、生徒は教員1人あたり、10人未満四捨五入。

それが北上していたことを示唆する。このことは、大都市東京(江戸)が活性化に及ぼすインパクトよりも、蚕糸業の核心地が活性化に与えるインパクトの方が大きかったことを物語っている。

(2) 維新前の所領分布
 両活性化集落における幕末の所領関係を検討

しよう(図3, 4)。最高活性化集落の基幹となっていた前橋中心の群馬県中央部の主体は前橋藩領であり、ここから西南方向の高崎・安中両藩領が続き、東南方向の東毛・埼玉県北縁部は旗本領であった。また埼玉県南の川越地域は川越藩、奥武蔵の越生は上総久留里藩であった。いいかえれば、前橋藩域を中核とし、高崎・安中両藩および旗本領を含む上・中・下位層の北

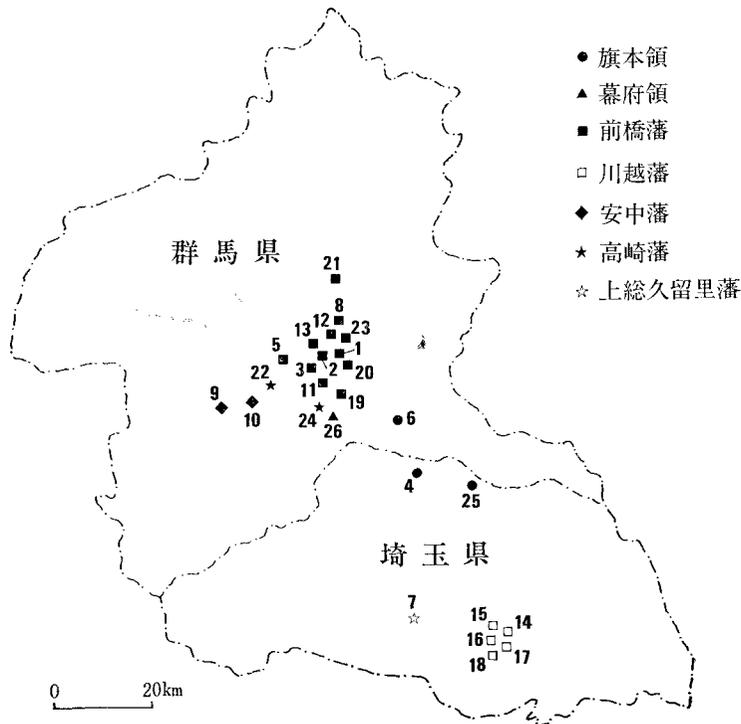


図3 最高活性化集落における幕末所領

注) 集落番号は図1に対応

資料：図4～13とも、『文部省第2年報』『皇国地誌』より作製

部最高活性化集落に対して、南部では、主体をなす川越藩領とその西方の上総久留里藩領となっていたのである。

一方、最低活性化集落では、上位の活性化が卓越する東毛は、旗本領4（南接する埼玉県北縁部を加えれば5）、館林藩領・伊勢崎藩領各2のほかは、幕府領・前橋藩領が各1に過ぎなかった。なお、西毛における上位の点在活性化集落は小幡藩領であった。奥武蔵では、上位の活性化をみたのは前橋藩領・下総古河藩領・旗本領各1であり、中位の活性化が幕府領、下位の活性化が一橋家領であって、これらも各1に過ぎなかった。下位の活性化が集中的に認められる北毛の利根川上流域では、沼田藩領・幕府領各3、旗本領2であり、北毛西部に点在する中位活性化地域は幕府領であった。

このように、最低活性化集落においては、旗

本領8、幕府領6、沼田藩領3、前橋藩領2、一橋家領1であって、所領分布の錯雑さを示し、なかでも奥武蔵においては、それが著しかったのである。

(3) 平民・士族の戸数構成

両活性化集落における士族ならびに平民の戸数を検討しよう（図5）。最高活性化集落では、総戸数および士族戸数の多い前橋・川越・松郷・安中が分布し⁷⁾、これらよりも少ない戸数を示す平民集落が付随して立地していた。この傾向は、とくに群馬県～埼玉県北部にわたって著しい。これに対して最低活性化集落は、相対的に平均化された少ない戸数を示す平民集落によって構成されていた。これらのことは、士族世帯の分布が活性化の一要因であったことを示唆している。

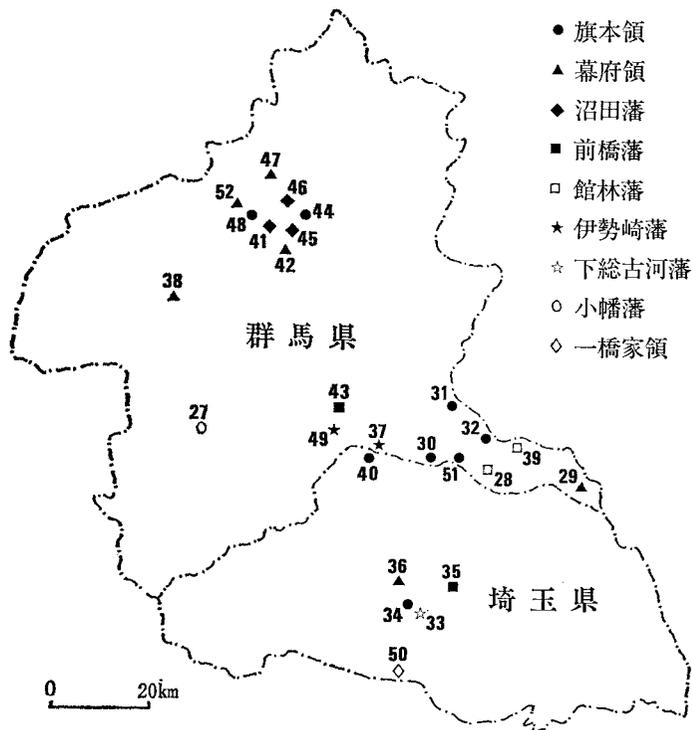


図4 最低活性化集落における幕末所領
注) 集落番号は図2に対応

(4) 雑税額の比較

両活性化集落における雑税額を、資料的制約⁹⁾により、群馬県について検討する(図6)。一般に、最高活性化集落の方が、最低活性化集落よりも高額である。最高活性化集落では、前橋～東明屋～安中～松井田を結ぶ東西方向の一連の上位活性化集落が高額軸となっている。しかし、最低活性化集落では、下位を主体とし、中位にも及ぶ北毛の活性化集落が、南部よりも高額を示し、とくに三島・月夜野において高額である。

これらの雑税額については、集落規模を勘案して考えねばならないので、次に1戸あたりの雑税額を検討しよう(図7)。最高活性化集落については、中核をしめる前橋町域よりも、外側の東明屋や松井田の方が高額である。一方、最低活性化集落については、北毛のうち、三島よ

りも下発知や月夜野の方が高額である。このことは、最高活性化集落の場合、その西側縁辺地域において農外所得が多かったのに対して、最低活性化集落では、むしろ北部においてそれが多く、南部に及んで減少していたことを示唆している。かかる事情の背景には、中山道沿いのコミュニケーションが、三国街道沿いのそれよりも著しかったという要因もあったものと推察されよう。

(5) 人口移動

活性化に関連する問題として、人口移動を取り上げてみよう。まず、最高活性化集落における平民の人口移動を考察すると(図8)、前橋・松井田・安中・下滝を主とする群馬県中央部では圧倒的な転入超過が認められたのに対して、川越を中心とする埼玉県側では逆に出超であっ

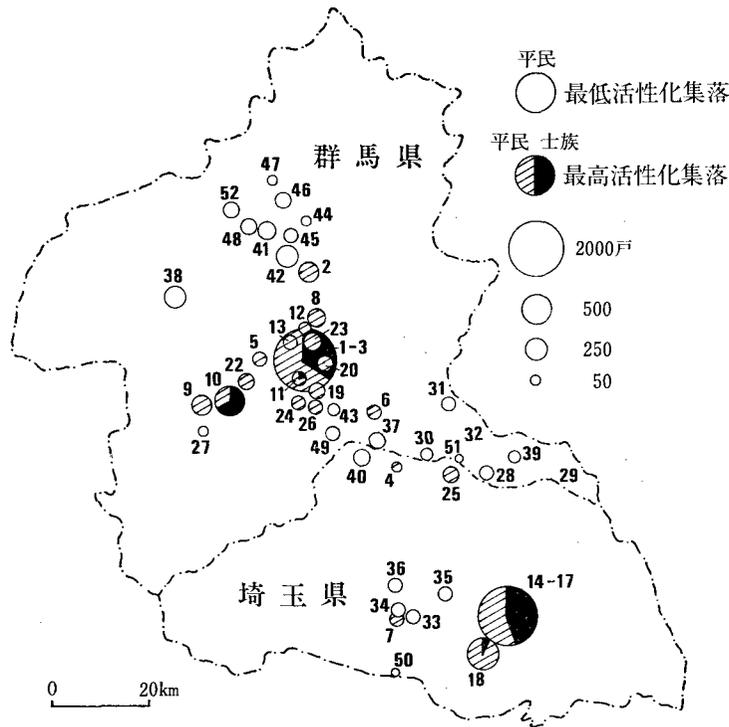


図5 最高・最低活性化集落における士族・平民の戸数（明治7年）

注) 前橋・川越については全町域についての数字。49において人口576（男291，女285）のうちその2.7%の16（男10，女6）が士族であるのみで，士族の世帯はまったくない。29・32は不明，28・39は安政2年（1855）「封内経界図誌」（『群馬県の地名』平凡社，1987，799・808頁），43・51は明治2年（1869）「宗門改帳」（前橋市史所収，同上572頁），「御改革組合村高帳」（近世後期，同上757頁）による。

た。一方，最低活性化集落においては（図8），比較的多くの転入が駒形においてみられたものの，北毛・東毛⁹⁾・西毛ともに，わずかな転出入のうちに入超が表れていたに過ぎない。そして埼玉県側の奥武蔵にいたっては，人口移動が少なく，わずかな出超が認められる程度であった。

また，最高活性化集落にだけ認められる士族の人口移動については（図9），群馬県中央部におけるかなりの転入と，それをしのぐ転出がみられたのに対して，埼玉県側の川越地域では圧倒的な転出が認められた。

つまり，平民については，最高・最低両活性化集落のいずれを問わず，群馬県側の転入超過に対する埼玉県側¹⁰⁾の転出超過が表れていたわ

けで，移動人口の絶対数は，最高活性化集落の方が最低活性化集落よりも多かったのである。したがって，人口移動と活性化の関係は密接であったと考えてよからう。そして士族人口の転出傾向については，埼玉県の方が群馬県よりも顕著に認められたのである。平民・士族ともに埼玉県南からの転出先はおそらく東京であったのではなかろうか。

(6) 馬の保有

馬は，地域の活性化に影響をおよぼすところの交通手段，あるいは農耕手段として重要な意味をもつ。そこで，馬の保有ないし飼育の状況と活性化の関係を検討してみよう。

最高活性化集落と最低活性化集落の両者につ

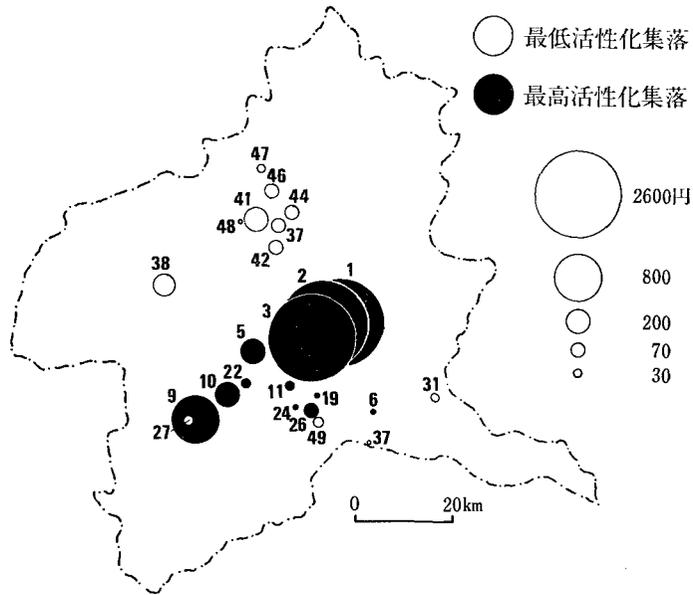


図6 最高・最低活性化集落における雑税額（明治7年）
注）前橋については全町域の雑税額

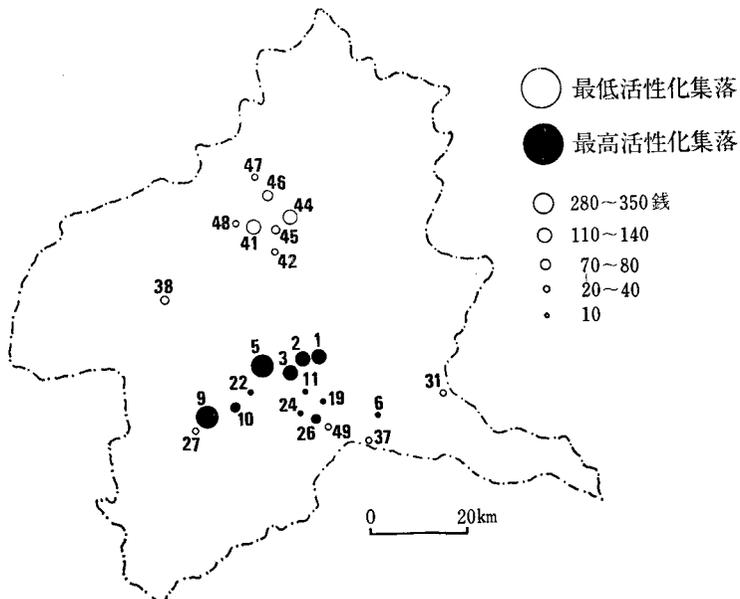


図7 最高・最低活性化集落における1戸あたり雑税額（明治7年）
注）前橋については全町域の1戸あたり雑税額

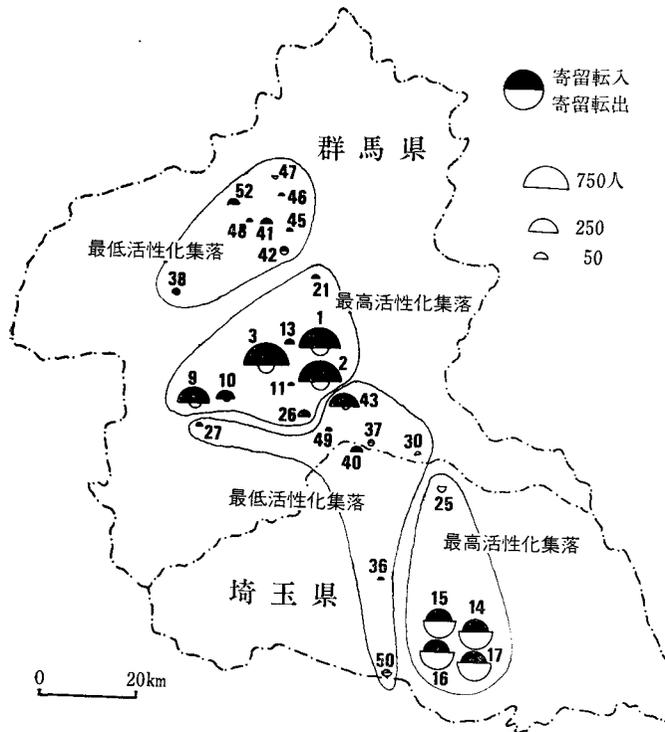


図8 最高・最低活性化集落における平民の人口移動（明治7年）
注）前橋・川越については各全町域の移動数

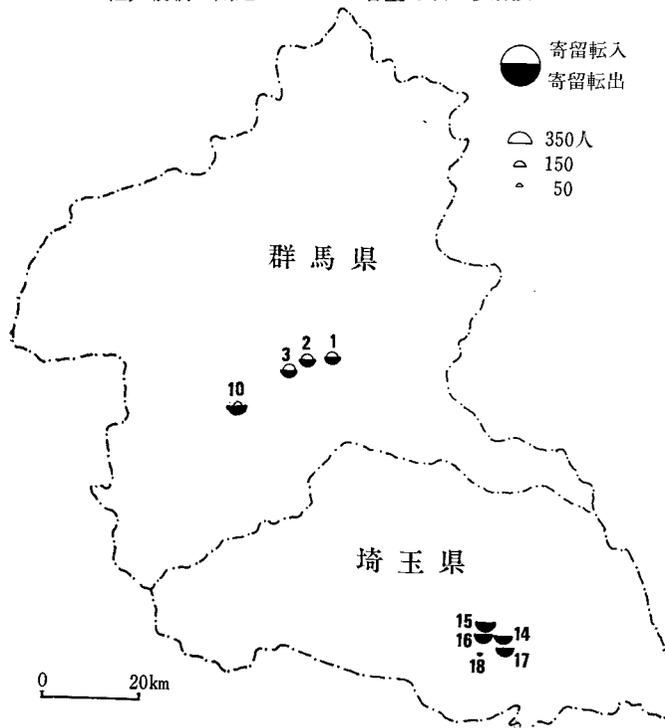


図9 最高・最低活性化集落における士族の人口異動（明治7年）
注）前橋・川越については各全町域の移動数

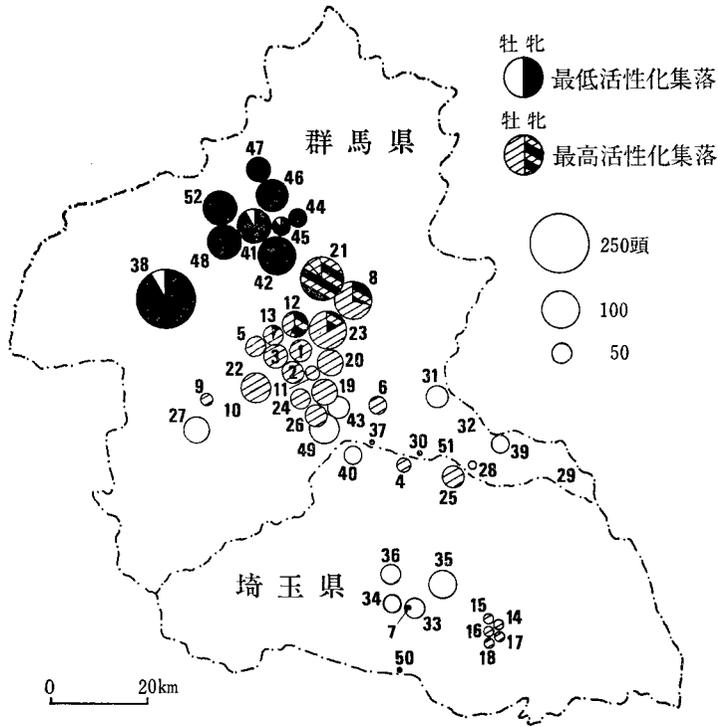


図10 最高・最低活性化集落における馬保有数（明治7年）

注）前橋・川越については全町域の数字。10・29・32・51については馬に関する記載がない。28・39については安政2年（1855）「封内経界図誌」（『群馬県の地名』平凡社，1987，799・808頁）による。43については天明2年（1782）「前橋藩領村々明細」（井田文書，同上572頁）より類推。図11も同様。

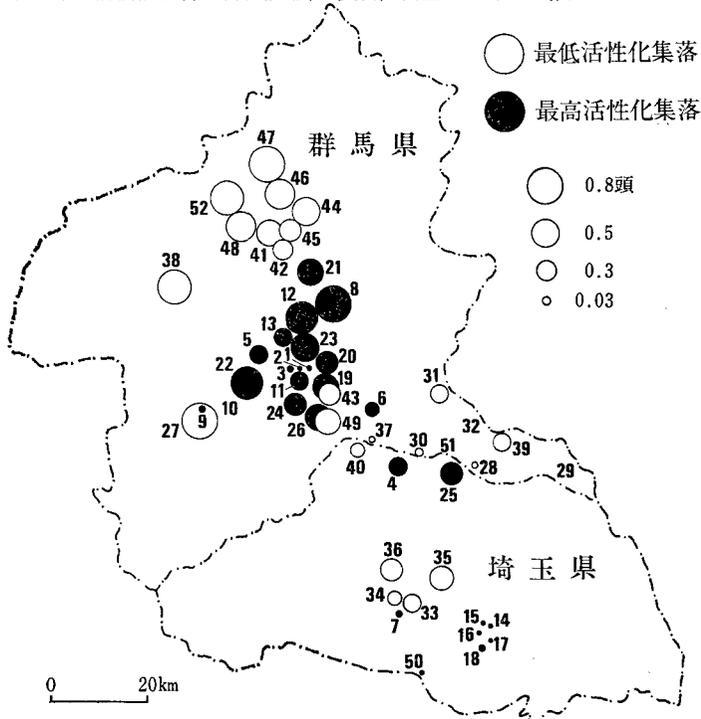


図11 最高・最低活性化集落における1戸あたり馬保有数（明治7年）

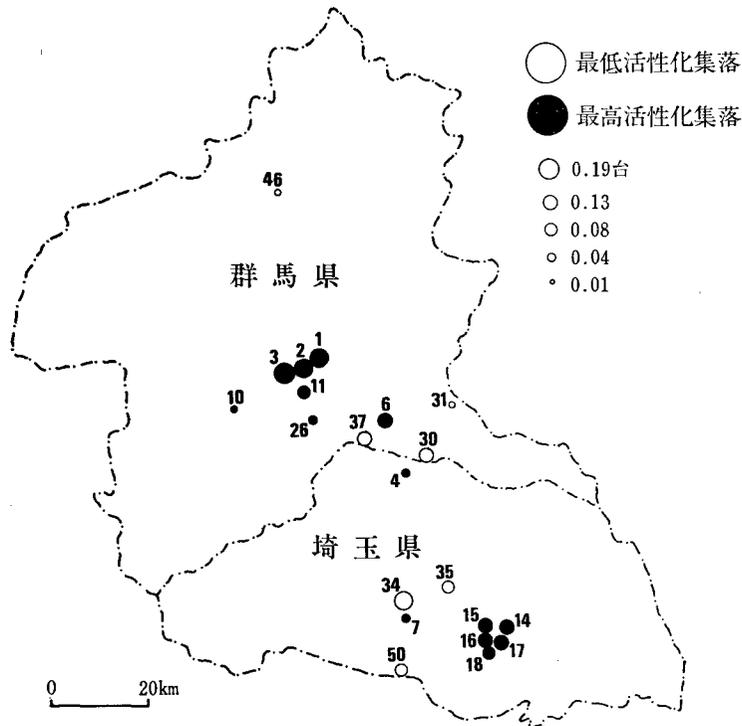


図12 最高・最低活性化集落における1戸あたり荷車数(明治7年)
 注) 前橋・川越については全町域の数字。50には農車1を含む。

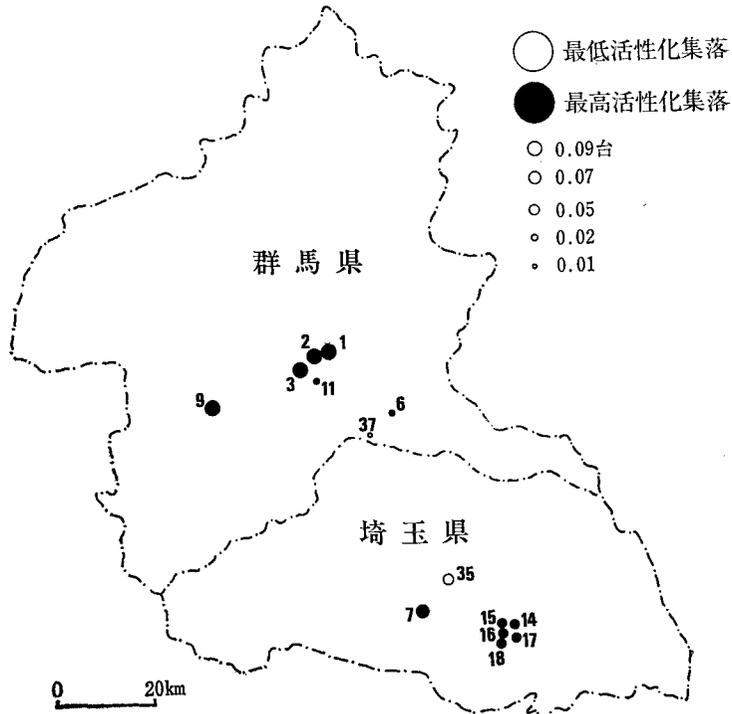


図13 最高・最低活性化集落における1戸あたり人力車数(明治7年)
 注) 前橋・川越については全町域の数字

いて馬の保有数を比較すると、一般に、後者における方が前者におけるよりも、広範にわたって数多く分布していた(図10)。集落の規模を勘案するために1戸あたりの保有数を比較しても、やはり同様の傾向が看取される(図11)。

しかし、最低活性化集落については、北毛のほとんどが牝馬であったのに対して、最高活性化集落では牝馬は、前橋よりも北方に位置する津久田・石井・原之郷・横室・上小出においてみられるに過ぎなかった(図10)。そして、北毛の牝馬多頭地域は、既述の雑税額分布(図6, 7)とも符合していたのである。つまり、最低活性化集落のうち、下位活性化が卓越する地域とその南方に位置する一部の最高活性化集落は、牧馬に関係する雑税納入地域であったものとみられる。

(7) 荷車・人力車の保有

家畜以外の輸送機関として、荷車・人力車について検討しよう。1戸あたりの荷車数を見ると(図12)、最高活性化集落では、前橋とこれに次ぐ川越において台数が多く、それらの周辺では少ない。一方、最低活性化集落では、台数が多いのは奥武蔵と東毛西部であり、これよりも北方ではきわめて少ない。これらの分布パターンを凝縮的に表すのが、同じく1戸あたりの人力車数分布であり(図13)、活性化集落分布の基幹を示している。

Ⅲ. 最高・最低両活性化に基づく地域区分

(1) 活性化の両極端——群馬県中央部と北毛地域——

最高活性化集落のうち、群馬県中央部においては、上位・中位・下位全階層が揃って分布していた。ここはかつての前橋藩領であった地域が多く、これに次ぐのは高崎藩領であった。士族戸数が多く、雑税納入額が高かった。また平民人口の転入が著しく、士族人口については転出が転入をしのいだ。多数の馬が保有されていたが、牧馬が盛んなのは西北における一部に過ぎなかった。そして荷車・人力車も多く、活性

化の中核をなしていたのである¹¹⁾。

これと対蹠的なのは、最低活性化集落のうちの北毛地域であった。西南端に離れて位置する三島が中位階層であるほかは、すべて下位階層であった。ここはかつて幕府領や沼田藩領・旗本領であり、平民世帯によって構成されていたが、最低活性化集落の中では雑税納入額が高かった。平民人口の転入が認められ、牧馬が盛んであったが、荷車はわずかにみられる程度で人力車はなく、活性化が著しく低かったのである。

a) 授業料0銭・生徒数¹²⁾100人以上校立地集落 月夜野東方約8kmの須川は、標高約550mで、西方に八高山を負い、赤谷川右岸の須川平に位置する。かつては温泉場¹³⁾をもつ幕府領であり、山林は村域の44%をしめ、耕地の84%が畑であった。三国街道に沿うとともに、南折して中之条に向かう交通の要衝であり、地租米84石=121円を納めていた。保有する馬85頭のうち、牝馬が83頭をしめる牧馬集落であったが、1戸あたりの耕地面積は約1町1反であった。

土壌は上質とはいえないが、豆・麦・粟・稗・煙草・蕎麦・桑には適するとされ、しばしば旱害に見舞われたという。しかし、全戸数127戸のうち125戸が養蚕農家であって、繭115石が前橋へ送られるほか、葉煙草1,200貫が渋川へ売られていた。1戸あたり家族員数は4.6人で、転入人口25(うち男17,女8)に対して転出人口20(うち男15,女5)という男性主体の転入超過がみられた。

b) 授業料0銭・生徒数90人校立地集落 沼田の北方約12kmにあり、月夜野・湯原両地間のほぼ中間にあたる上牧は利根川左岸に位置する。かつての沼田藩領であり、山林・秣場が村域面積の71%をしめ、そのうちの60%が山林であった。耕地の70%が畑、残りが水田であり、1戸あたりの家族員数は4.1人、同じく耕作面積は7反2畝であった。土壌は稲・桑に適するとされ、繭180石は沼田・前橋・富岡へ、また乾粟150駄(1駄=9斗)、生柿60貫、乾柿10駄の林産関係品は、ともに前橋・高崎へ売られていた。

135戸の農家のうち養蚕農家は92戸であり、農

間余業として薪炭12戸、水車2戸、酒造・工業各1戸を数え、銃猟者2人も認められた。ここは清水越街道に沿うとともに、同街道から東折する支道が佐山に向かっていた。輸送手段としては荷車1のほか馬80頭がみられたが、すべて牝馬であり、牧養を兼ねたものとみられる。貢租としては地租米87石=72円のほか雑税97円が納められ、人口移動については男5人の転入が認められた。

上牧の北方約5kmの湯原は群馬県の公立小学校立地の北限であり、郵便局・通運会社立地の北限でもあった。利根川右岸の河谷平野に位置する旧幕府領であり、耕地は村域面積の93%に達していた。耕地の83%は畑であり、残りが水田であった。1戸あたりの家族人員は4.4人であったが、同じく耕地面積は9反7畝であった。

気候・土壌の点で適するのは、粟・稗ぐらいであり、利根川上流域にあたるため、水利が不便である上、しばしば高地水害を被っていた。したがって救荒食品としての乾柿がつけられていたが、就業構造は「男農桑業46戸、農隙商ヲナスモノ2・3戸、銃猟業4人、女養蚕ニ従事シ、農ヲ助クル者66人¹⁴⁾」とされるように、養蚕を主体としていた。

北越清水越道に沿い、牝馬41頭を保有し、前橋・沼田向けの繭52石を出荷していた。温泉があったが、もっぱら村民の利用に供されるのみで、貢租としては地租米22石=31円、賦金2円のほか、雑税21円を納めていた。

沼田の東北方約6kmの下発知は、薄根川の支流発知川の右岸の旧旗本領であった。村域の93%は耕地であり、耕地中の畑の率は62%であったが、水田化により43%に減少した¹⁵⁾。気候・土壌は蕎麦・稗・黍に適するとされていたが、就業構造は「男農桑ヲ業トスル者48戸、商ヲ業トスル者1戸、女養蚕ヲ業トシ農ヲ助クル者60人¹⁶⁾」とされ、中等繭18石が前橋へ送られていた。その輸送路としては、沼田往還が使われたものと思われる。牝馬23頭の保有は牧養を物語り、貢租としては地租米77石=45円のほか、雑

税67円を納めていた。

沼田の北西約3kmの井土上は、利根川左岸の河谷平野に位置し、旧沼田藩領であった。村域面積の84%が耕地化されていて、耕地の57%が畑であった。1戸あたりの家族員数は3.7人であったが、同じく耕地面積は9反1畝であった。気候・土壌は稲・麦・桑に適していたが、「男女共ニ農桑ノ外異業ナシ¹⁷⁾」とされるほど養蚕農家が多く、繭21石、蚕莖6,000枚のいずれも前橋・沼田へ売られていた。その輸送路としては、清水越往還が利用されたものとみられる。牝馬26頭の保有は牧養を示唆し、貢租として地租米146石=91円、賦金2円のほか、雑税69円を納めており、人口移動については、8人の転入(男6,女2)が認められた。

月夜野西方約5kmの新巻は、大峯山南麓台地をなす池の原と、赤谷川北岸の今宿によって構成され、三国街道・同協往還に沿う旧旗本3給地であった。村域面積の94%が耕地であり、耕地の70%は畑であった。1戸あたりの家族員数は4人であったが、同じく耕地面積は1町2反に及んでいた。

就業構成は「男農業127戸、工業1戸、女男業ヲ助ケ養蚕ニ従事スルモノ190人¹⁸⁾」を示していた。標高430~500mに及ぶ冷水地域であるため稲作の反当収量は伸びず、桑が盛んに作付けられ、繭87石、大豆121石が沼田・前橋へ売られていた。

牝馬80頭の保有は、牧養の実態を示唆し、村の西方には温泉があって、浴場・旅館各3、年間浴客約500人を数えていた。しかし貢租としては地租米131石=121円、賦金2円のほかは、雑税18円に過ぎず、人口移動については、転出3人(男)が認められた。

c) 授業料0銭・生徒数80人校立地集落 利根川本流とその支流である赤谷川に囲まれる月夜野は、上牧・井土上・新巻各村を結ぶ三角形のほぼ中点にあり、三国裏街道に沿う旧沼田藩領であった。村域面積の94%が耕地であり、耕地の62%は畑であった。また1戸あたりの家族員数は4.2人であったが、同じく耕地面積は9

反1畝であった。気候・土壌は、稲・粟・豆に適するとされたが、繭134石が高崎・前橋・富岡へ、大豆130石、葉煙草363貫が渋川へ、それぞれ送られていた。

就業構成は「男農桑業160戸、商1戸、酒造3戸、農隙銃猟ヲ業トスル者5人、女皆ナ(ママ)養蚕ヲ業トシ傍ヲ農ヲ助ク¹⁹⁾」とされていた。牝馬81頭、牡馬2頭の保有は牧養の盛況を示唆し、貢租は地租米173石=132円、賦金4円のほか、雑税200円に及んでいた。しかも人口移動については、転入41人(男23,女18),転出2人(男女各1)という入超を示していたのである。

沼田の西南約2kmの下川田は利根川右岸にあり、かつては幕府領と旗本領に分かれていた。川田山の東北麓にあたるため、畑が耕地の79%をしめ、1戸あたりの家族員数は4.3人であり、同じく耕地面積は7反1畝であった。土壌は良好で、とくに煙草に適するとされ、葉煙草4,689貫、豆169石が、繭162石とともに沼田・前橋・渋川へ売られていた。

総数271戸の就業構成は「男農247戸・商12戸・雑業13戸・銃猟業5戸、女男業ヲ助ケ養蚕ニ従事ス369人²⁰⁾」であった。牝馬103頭の保有は盛んな牧養を示唆しており、貢租として地租米158石=218円、賦金1円のほかに、雑税53円を納めていた。そして、人口移動については、転出12人(男8,女4)に対して転入16人(男10,女6)という入超が認められた。

d) 授業料2銭・生徒数80人校立地集落 中之条の西南約8kmの三島は、吾妻川右岸の三島山北麓に位置する。旧幕府領であり、村域面積の75%が耕地化されていて、耕地の94%は畑であった。1戸あたりの家族員数は4.5人であったが、同じく耕地面積は7反3畝であった。土壌は麻・桑・麦・粟・稗・蕎麦に適するとされ、麻の生産は吾妻郡の核心となっていた。すなわち、6,321貫の生産高のうち、上・中等品は氷見・高岡へ、また下等品は柏崎へ売られていた。

一方、繭370石は、渋川・高崎・前橋・原町・中之条の市街に送られていた。総数297戸のう

ち「男農桑業トスル者250戸、女養蚕及ヒ農業ヲナス者750²¹⁾」であった。信濃往還(支道)に沿い、人口移動については、転入10人に対して転出8人(男)であった。また、牝馬235頭、牡馬10頭の保有は牧養の盛況を示していた。麻・繭の広範な商圏と相まって、活性化の中位階層をなしていた。貢租としては、地租米44石=422円、賦金2円のほか、雑税101円を納めていたのである。

(2) 東毛～埼玉県北縁地域

東毛～埼玉県北縁地域の最高活性化集落をみると、その西部に上位階層と下位階層が分布していた。ここはいずれもかつての旗本領であって、平民戸数に限られ、雑税額が少なく、人口移動がわずかにみられたに過ぎない。人力車数は少なく、馬・荷車の分布が認められた。

これに対して、東毛～埼玉県北縁地域の最低活性化集落をみると、上位・中位・下位の全階層が揃って分布していた。ここはかつて旗本領を始めとし、館林藩領に属していた。平民戸数がほとんどを占め、駒形の転入人口を除けば、移動人口は、他の最低活性化集落と同様に少なかった。雑税額は少ないが、馬はかなり保有され、一部では荷車・人力車の分布がみられた。

a) 授業料0銭・生徒数100人以上校立地集落 樋越は、玉村の北方約3km、駒形と玉村のほぼ中間にあたり、利根川左岸に近く、西に端気川が流れ、東北をめぐる藤川用水堀によって灌漑される旧伊勢崎藩領であった。村域面積の77%が耕地であり、耕地のうち畑が田をやや上回っていた(畑54%,水田46%)。1戸あたり家族人員は5.3人、同じく耕地面積は1町2反であった。なお、人口585のほとんどは平民であったが、最低活性化集落の中では珍しく、士族人口16(男10,女6)を数えていた。また、人口移動については、転出11人(男7,女4),転入9人(男5,女4)が認められた。これらのことは、城下町伊勢崎に近かったためと思われる。

気候・土壌は稲・麦・桑よりも粟・稗・大豆

に適するとされたが、繭66石、生糸46貫、木綿159貫（いずれも中等品）が、陸路伊勢崎・玉村・駒形へ売られていたものとみられる。就業構成は「男農業スル者115戸、女縫織ヲ業トスルモノ16人、養蚕ヲ業トスル者80人²²⁾」であり、牡馬60頭を保有し、貢租としては地租米222石＝122円、雑税29円を納めていた。

太田の南々東約5kmの吉田は旧旗本7給地であり、利根川左岸に近く、水田は渡良瀬川支流の休泊堀によって灌漑されていた。しかし寛文年間（1661～1673）には耕地の86%が畑であった²³⁾。尾島往還に沿い、土壌は、蕎麦・甘藷をはじめ、米・大麦・小麦・岡穂・大豆に適するとされており、近世後期には44戸を数えていた²⁴⁾。

b) 授業料0銭・生徒数90人校立地集落 前橋・伊勢崎間のほぼ中間に位置する駒形はかつての前橋藩領であり、東方には広瀬川、西方にはその分流である那波用水を控え、耕地が村内面積の61%を占め、耕地の61%が畑であった。土壌は稲・桑・小麦・大麦・大豆に適するとされ、下等米165石、大豆15石、小麦114石、小豆1石、菜種3石、大角豆8石のほか、桑480駄、生糸24貫、木綿20貫の繊維関係品を生産していた。

東京～前橋～新潟を結ぶ江戸道（清水越街道）に沿う宿駅に根ざしており、「男農ヲ業トスル者81戸、女縫織ヲ業トスルモノ20人、工ヲ業トスル者23戸、製糸ヲ業トスル者30人、商ヲ業トスル者5戸²⁵⁾」を数えていた。しかも、人口移動については、転出23人（男13、女10）に対して、転入275人（男165、女110）という顕著な入超が認められた。多大の労働力需要が地域活性化のための人的育成、すなわち教育への余裕を生ぜしめなかったのであろう。

c) 授業料0銭・生徒数80人校立地集落 本庄の東北約2.5kmの仁手は、利根川中流右岸の自然堤防を主軸とする旧旗本領であった。沖積平野ではあるが、村域面積の93%をしめる耕地の74%は畑であり、残りが水田であった。1戸あたりの家族員数は4.3人であり、同じく耕地

面積は4反7畝に過ぎなかった。

気候・土壌は稲・茶に適するとされたものの、しばしば洪水と旱害に苦しんでいた。にもかかわらず「鬮村農桑を専²⁶⁾」らとし、米212石、大麦312石、小麦155石、大豆93石、小豆13石、蕎麦28石、藍葉3,000貫の農産物のほか、横浜向けの美質蚕卵紙3,988枚、さらに生糸17貫、生絹25疋、生太織200疋を生産していた。中山道および厩橋道に沿って、牡馬24頭を保有し、貢租としては地租米104石＝144円、賦金214円を納めていた。なお、人口移動については、転入28人（男13、女15）を数えていた。

d) 授業料2銭・生徒数80人校立地集落 境の西方約2kmの小此木は、北方の広瀬川、南方の利根川の両河川に挟まれ、旧伊勢崎藩領の低地であったが、村域面積の84%をしめる耕地はすべて畑であった。1戸あたりの家族員数は4.9人であったが、同じく耕地面積は5反8畝に過ぎなかった。土壌は小麦・桑に適するとされたが、蚕種2,771枚、繭180石、屑繭600石のほか、太織300疋が生産されていた。その就業構成は「男農ヲ業トスル者91戸、工ヲ業トスル者34戸、商35戸、女農桑ヲ業トスル者3人、蚕織ヲ業トスル者192人²⁷⁾」を示していた。

水陸の輸送が活発であったことは、船15²⁸⁾、荷車24、人力車2、牡馬2の保有によって知られ、貢租として地租148円、賦金30銭に対し、雑税16円を納めていた。しかし、人口移動については、転入7人（男5、女2）、転出9人（男5、女4）であり、出超を示していた。つまり、旧伊勢崎藩領における集約的な土地利用、就業構成の高度化をもってしても、活性化の面ではむしろ中位階層にとどまっていたのである。

旧館林藩領の足次は、館林の北方約2kmの渡良瀬川本・支流地低地に位置していた。しかし、安政2年（1855）には耕地の62%が畑であり、1戸あたりの家族員数は5人であった²⁹⁾。気候・土壌は米・麦・大豆類に適するとされ、男は縄ないのほか職人稼ぎ、女は木綿糸撚織稼ごの副業に従事していた³⁰⁾。ここは、武蔵・下野往還に沿っており、馬27頭を保有していた³¹⁾。

e) 授業料3銭・生徒数90人校立地集落 桐生・足利間の桐生道のほぼ中間に位置する吉沢は、西方に唐沢山を負い、渡良瀬川沿いの平地が広く、耕地の64%は水田であった。1戸あたりの耕作面積は約9反7畝であり、147戸のうち、農間雑業は6戸に過ぎなかった。かつての旗本3給地であったが、おもに婦女子の労働力に依存する織物(綿緯南部120反、白絹15反)のほか、繭30石、漉返紙15,000枚、瓦10,000枚が足利・桐生へ売られていたものとみられる。したがって、地租米278石=229円、賦金1円のほか、雑税32円を納めていた。しかしこの雑税額は、北毛一般と比べるとわずかであった。

また、保有する馬34頭はすべて牡馬であり、農耕および運搬用であったと考えられるが、その頭数は北毛一般よりも少なかった。一方、荷車は1を数えるに過ぎなかった。1戸あたり家族員数は4.6人であったが、移動については転入2戸にとどまっていた。

秋妻は足利南方約5kmの旧旗本7給地であり、ここから東方には上三林・足次・海老瀬、西方には吉田・吉沢・堀口の最低活性化集落が数kmないし約10km間隔で分布していた。渡良瀬川支流矢場川沿いの低地であるが、寛文8年(1668)には石高の64%は畑であった³²⁾。気候・土壌は米・麦・菜種・桑に適するとされ、足利道に通じていた。

f) 授業料3銭・生徒数80人校立地集落 堀口は太田・深谷のほぼ中間に位置し、利根川沿いの低平地を占める。しかし、耕地はすべて畑であり、一方、畑面積の33%にあたる荒地畑もみられた。ここも吉沢同様、かつての旗本3給地であった。1戸あたりの耕作面積は1町余りであり、土壌は麦・大豆・藍・桑に適するが、「水利便ナリト雖モ高畦ハ往々早ニ苦シム³³⁾」とされていた。

養蚕農家が卓越しており、生産された蚕種3,529枚、繭660貫、生糸60貫、藍4,000貫の織維関係品は、いずれも中等品であるが、境町などへ売られていたものとみられる。輸送手段としては、水運を反映する荷船14が注目される³⁴⁾

ほか、車10も上げられるが、馬の保有については牡頭2頭だけであった。1戸あたり家族員数は6人であったが、移動人口については転入4人(男女各2)に対して転出11人(男8,女3)であり、男性主体の転出がめだつた。

下野藤岡南方約3.5kmの海老瀬も、かつては幕府領と旗本11給地であった。渡良瀬川と豆田川に囲まれた低地が広いが、耕地の84%は畑であった³⁵⁾。気候・土壌は米・麦・大豆・小豆・菜種・桑に適するとされ、古河往還・下街道・藤岡道・板倉道に通じていた。水路が開かれたのは明治8~9年(1875~76)と推定されているが、享保15年(1734)の「従古河所々江之船賃積帳」(井上文書)では、古河~旧船戸(北海老瀬)間の高瀬舟(船賃1分200文・小船800文)が就航していた³⁶⁾。

館林の西南約4kmの上三林も、かつては館林藩と旗本11給の相給地であった。北方約4kmの多々良沼からの分水による灌漑地域であったが、旗本領を除く安政2年(1855)の耕地については、その56%が畑であり、1戸あたりの家族員数は4人であった³⁷⁾。気候・土壌は米・麦・草綿・大豆・小豆に適するとされ、館林道に沿っていたものの、馬の保有は6頭に過ぎなかった³⁸⁾。

(3) 川越~奥武蔵地域

川越~奥武蔵地域における最高活性化集落は東部の中位階層を主とし、西部は上位階層であった。東部はかつての川越藩領であり、西部は旧上総久留里藩領であった。東部では士族戸数が多く、平民人口については転入をしのぐ転出が認められ、士族人口については、転入はなく転出だけであった。一般に馬の保有は少なかったが、荷車・人力車が多く、町屋的な発展を示していた。

これに対して最低活性化集落は、奥武蔵に限られていた。平民世帯によって構成され、上位階層を主体とし、中位および下位階層もみられた。かつての所領は、前橋藩領・下総古河藩領・幕府領・一橋家領と様々であった。人口移動

は少なかったが、馬の保有数は同地域の最高活性化集落をはるかにしのぎ、荷車もかなり保有していた。

a) 授業料0銭・生徒数100人以上校立地集落 飯能の西南約3kmの下畑は、入間川支流の成木川左岸に位置する。旧一橋家領であり、山林が村域面積の44%をしめ、耕地の83%は畑、残りが水田であった。1戸あたりの家族員数は6人であったが、同じく耕作面積は4反3畝に過ぎなかった。土壌は稲・麦・桑・茶に適するとされ、米41石、大麦149石、大豆14石、小豆3石、粟23石、稗10石、蕎麦7石の穀物～豆類のほか、桑155駄、木綿綿2,835反の繊維関係品が生産されていた。

これらの生産物の輸送路としては川越街道が利用されたと考えられ荷車3、農車1、牡馬1を保有していた。貢租としては地租米84石=12円が納められていたに過ぎず、人口移動については、転入4人(男女各2)に対して、転出19人(男11,女8)という著しい出超が認められた。

b) 授業料2銭・生徒数80人校立地集落 小川の南方約4kmの五明は、雀川(都幾川支流)沿いに位置する旧幕府領であった。村域面積の85%が耕地であり、耕地の85%が畑で、残りが水田であった。1戸あたりの家族員数は5.9人であったが、同じく耕作面積は5反8畝に過ぎなかった。

土壌は桑・楮に適するとされ、米125石、大麦212石、小麦52石、大豆85石、小豆23石、粟42石、茶160石、薪2,400駄のほか、繭40石、桑1,500駄、蚕種原紙120,000枚、生糸260疋、生絹260疋の蚕糸～織物関係産品、楮960貫、細川紙260貫、半紙2,500貫、美濃紙1,500貫、西の内紙650貫、生仙花紙500貫のいわゆる小川和紙産品が生産されていた。川越道に通じ、牡馬28頭を保有しており、貢租としては地租米34石=99円、賦金72円を納めていた。しかし人口移動については、転入1人(女)に対して、転出7人(男2,女5)という出超が認められた。

c) 授業料3銭・生徒数100人以上校立地集

落 松山南方約4kmの高坂は、北方を東流する都幾川と、南方を同じく東流する越辺川の両河川に挟まれ、耕地のうち西部の台地が畑(50%)であり、残りが水田であった。1戸あたりの家族員数は5.4人、同じく耕作面積は1町1反余りであり、土壌は稲・麦・桑・茶に適するが、「水利不便時々早に苦しむ³⁹⁾」とされていた。

農家は養蚕や薪の採取を兼ねることが多く、繭20石、桑500駄のほか、米625石、大麦520石、製茶42貫が生産され、貢租として地租米234石=22円を納めていた。かつての前橋藩領であり、東京(江戸)から秩父・西上州へ向かう秩父道と、八王子からの日光脇往還の両者がここで交叉するため、牡馬45頭のほか、荷車10(大八車1,小車9)、人力車5が保有され、人渡船・馬渡船各1を数えていた。

坂戸東南約4.5kmの森戸は、旧下総古河藩領であり、低地・台地を縫って高麗川が北流する。耕地の65%は畑であり、残りが水田であった。1戸あたりの家族員数は5.6人であったが、同じく耕作面積は5反5畝に過ぎなかった。土壌は稲に適するとされたが、養蚕農家が多く、絹270疋、太織60疋のほか、苧130駄(1駄=54枚)が生産されていた。牡馬26頭を保有し、地租米139石=90円を納入する川越道沿いの織物産地だったのである。

越生・森戸間のほぼ中間に位置する川角は、旧旗本2給地であり、越辺川の氾濫原が東南から西北へ低下する。森戸と同様、耕地の66%が畑であり、残りが水田であった。1戸あたりの家族員数は4.7人であったが、同じく耕作面積は9反1畝であった。土壌は稲・大麦に不適で、小麦・芋類に適するとされたが、養蚕農家が多く、繭90石、生絹300疋、生太織200疋のほか、鶏卵300個、楮15駄、薪50駄、製茶42貫が生産されていた。牡馬21頭のほか、荷車20を保有し、貢租としては地租米46石=103円、賦金16円を納めて、森戸と同様に川越道沿いの織物産地だったのである。

(4) 西毛地域

西毛における最高活性化集落である松井田・安中は、ともに旧安中藩の上位階層であった。いずれも戸数が多く、特に安中では士族戸数が平民戸数をしのいでいたが、雑税額は安中よりも松井田の方が多かった。平民人口の転入が多く、この点でも松井田は安中を上回っていた。一方、安中における士族人口の転出は著しかった。馬や荷車の保有は少なかったが、松井田では人力車の保有が多かった。

これに対して西毛における最低活性化集落は、孤立する上位階層（授業料3銭、生徒数80人）の八木連だけであった。ここは、松井田南方約2.5 km にあり、大桁山の東北麓から高田川（鐺川支流）右岸にまたがっていた。かつての小幡藩領であり、耕地の72%が畑であった。1戸あたりの家族員数は5.4人、同じく耕作面積は7反3畝であり、土壌は稲・麦・桑には不適であるが、麻には適するとされていた。かくて、麻370貫が滋賀県へ出荷されたが、不適なはずの桑が栽培されたく、繭68貫、生糸15貫が松井田へ送られていたとみられる。保有されていた牡馬50頭は、おもにこれらの出荷品の輸送用に使われていたのであろう。

貢租としては地租米55石=67円、賦金1円のほか、雑税25円を納めていたに過ぎない。荷車・人力車は分布せず、平民世帯によって構成され、人口移動については転入6人（男4、女2）が認められた。

IV. むすび

東日本におけるプロト産業化期の活性化が最も著しく表れた群馬・埼玉両県⁴⁰⁾について、最低活性化集落を取り上げ、これをすでに論じた最高活性化集落⁴¹⁾と比較すると、次のように要約される。

(1) 最高活性化集落の分布は活性化の波の南下を示唆していたが、最低活性化集落の分布はそれの北上を示唆していて、大都市東京（江戸）が活性化におよぼすインパクトよりも、蚕糸業の核心地が活性化に与えるインパクトの方が大

きかったことを物語る。

(2) 旧所領をみると、最高活性化集落については、北部では前橋藩域が中核となり、これに続いて高崎・安中両藩および旗本領に広がるが、南部は主体をなす川越藩領と西方の上総久留里藩領によって構成されていた。これに対して、最低活性化集落においては、旗本領・沼田藩領・前橋藩領・一橋家領の分布が錯雑をきわめていた。また幕府領は、最高活性化集落においては1に過ぎなかったが、最低活性化集落では7⁴²⁾におよんでいたのである。

(3) 士族戸数が認められるのは、最高活性化集落である前橋～前代田、川越～松郷、安中に限られていた。しかも、これらは群馬県側では活性化の上位階層に属しており、士族世帯の分布が活性化の一要因であったものとみられる。

(4) 群馬県における雑税納入額の分布をみると、最高活性化集落の方が最低活性化集落よりも高額であった。また、前者では中央部から西部にかけて、後者では北部において納税額が高く、中山道沿いのコミュニケーションの方が三国街道沿いのそれよりも著しかったことを示唆する。

(5) 人口移動をみると、平民については最高・最低両活性化集落のいずれを問わず、一般に群馬県側の転入超過に対して埼玉県側の転出が表れ、また移動人口の絶対数は、最高活性化集落の方が最低活性化集落よりも多かった。一方、士族の転出は、埼玉県の方が群馬県よりも顕著に認められた。埼玉県南の転出先については、東京が推測されよう。

(6) 最高活性化集落と最低活性化集落について馬の保有数を比較すると、一般に後者における方が前者におけるよりも広範にわたって数多く分布していた。そして、最低活性化集落のうち、下位活性化が卓越する北毛地域と、その南方に続く一部の最高活性化集落は、牧馬に関係する雑税納入地域であったものとみられる。

(7) 1戸あたりの荷車数をみると、最高活性化集落では前橋とこれに次ぐ川越において台数が多く、それらの周辺では少ない。一方、最低

活性化集落では、台数が多いのは奥武蔵と東毛西部であり、これよりも北方ではきわめて少ない。これらの分布パターンを凝縮的に表すのが、同じく1戸あたりの人力車数分布であり、活性化集落分布の基幹を示す。

(8) 最低の活性化を示す北毛は、最高活性化の中核をなす群馬県中央部と対蹠的であった。いずれの集落も牧馬・養蚕を主体としていたが、活性化が高まるにつれて、葉煙草のほか、蚕筴、栗・柿、麻の出荷、あるいは温泉立地の集落もみられ、かなりの雑税が納入されていた。また、活性化の高まりとともに、旧幕府領のほか旧沼田藩領・旧旗本領の集落も認められ、人口移動の上ではやや入超の傾向が表れていた。

(9) 東毛～埼玉県北縁地域は、最高活性化集落が上・中両階層の旗本領によって占められていたのに対して、最低活性化集落は、上・中・下3階層にわたる旗本領・館林藩領・伊勢崎藩領・前橋藩領・幕府領によって構成されていた。ここでは活性化が高まるにつれて、次のような傾向が認められた。すなわち、蚕糸品のほかに織物・漉返紙・瓦などの出荷が加わり、旗本領の多給化が表れていた。また人口移動の点では出超・入超がこもごも表れ、牡馬の保有が一般的であったが、雑税額は北毛よりもはるかに少なかった。

(10) 川越～奥武蔵地域では、最高活性化集落は、町屋的な発展を顕著に示す川越と、上位階層を表す越生とからなっていたが、最低活性化集落は、上・中・下各階層を表す奥武蔵地域に限られていた。その上、人口移動が少なく、馬を多く保有し、荷車もかなり使用していた。ここでは、活性化の高まるにつれて次のような傾向が表れていた。すなわち、蚕糸品のほかの出荷物が、木綿織から絹織物に変わり、それ以外に和紙・楮・製茶・筴・鶏卵などが加わり、荷車・人力車の保有数が増加したのである。

(11) 西毛における最低活性化集落は、東毛の堀口・海老瀬・上三林と並んで、上位の活性化を示す八木連だけであった。最高活性化2集落(松井田・安中)と異なり、荷車・人力車はな

く、馬については牡馬だけを保有し、近在向けの蚕糸品のほかは、麻が滋賀県へ出荷されていた。また、平民世帯によって構成され、わずかな転入がみられたに過ぎない。

(城西大学経済学部)

〔注〕

- 1) 田村正夫「日本におけるプロト産業化期の地域活性化(1)一群馬・埼玉両県の公立小学校の授業料・教員数を手がかりに」城西大学大学院研究年報、第4号、1988、1頁の注1)。
- 2) 前掲1)、1～23頁、別図10枚。
- 3) 田村正夫「日本におけるプロト産業化期の地域活性化(2)一群馬・埼玉両県における公立小学校立地集落の最高活性化一」歴史地理学紀要、32、1990、109～128頁。
- 4) 授業料総額が掲載されている学校については、それを当該学校の生徒数で除し、銭未満を四捨五入した。また生徒数については、各校生徒数を教員数で除し、10人未満を四捨五入した。
- 5) 群馬県『上野国郡村誌(1877～1885)』群馬県文化事業振興会、1987、復刻。
- 6) 埼玉県『武蔵国郡村誌(1875～1876)』埼玉県立図書館、1953、復刻。
- 7) 前橋に南接する前代田においても、士族戸数が認められた。
- 8) 前掲6)には雑税額が記載されていないため、埼玉県については不明である。
- 9) 一部、埼玉県北縁部を含む。以下同じ。
- 10) 埼玉県北縁部の最低活性化集落を除く。
- 11) 前掲3)、112～128頁。
- 12) 教員1人あたり生徒数とし、10人未満四捨五入。以下同じ。
- 13) 阿久津宗二他編『日本歴史地名大系10、群馬県の地名』平凡社、1987、124頁。
- 14) 前掲5)、13、187頁。
- 15) 前掲5)、12、129頁には、「田17町5反8畝18歩、畑28町7反4畝29歩、林2町2反9畝5歩、総計48町6段2畝28歩、更生反別、田25町4段1畝22歩、畑19町3反29歩、宅地6反4畝23歩、寺地5畝26歩」とある。
- 16) 前掲5)、12、133頁。
- 17) 前掲5)、12、81頁。
- 18) 前掲5)、13、156頁。

- 19) 前掲5), 13, 145頁。
 20) 前掲5), 13, 113頁。
 21) 前掲5), 11, 94頁。
 22) 前掲5), 14, 280頁。
 23) 前掲13), 757頁には、『寛文地方要録』(館林市立図書館蔵)の「高464石1斗余, 田8町9反余・畑56町6反余」が記載されている。
 24) 前掲23), 御改革組合村高帳。
 25) 前掲5), 2, 133頁。
 26) 前掲6), 8, 12頁。
 27) 前掲5), 14, 146頁。
 28) 1戸あたりの船舶数は0.09であり, 最低活性化集落中, 第2位であった。
 29) 前掲13), 799頁には、『封内経界図誌』による「田48町5反余・畑78町2反余, 家数100・人数497」が記載されている。
 30) 前掲29), 安政3年(1856)の「館林組合村々地頭姓名其外書上帳」(青山文書)。
 31) 前掲29)。
 32) 前掲13), 760頁には、『寛文郷帳』による「田方920石余・畑方538石余」が記載されている。
 33) 前掲5), 15, 325頁。
 34) 1戸あたりの船舶数は0.18であり, 最低活性化集落中, 第1位であった。
 35) 前掲13), 775頁には, 文化6年(1809)の「海老瀬村本高覚」による畑355町2反・水田66町8反が記載されている。
 36) 前掲13), 776頁。
 37) 前掲13), 808頁によれば, 安政2年(1855)の『封内経界図誌』では, 館林藩領において, 古上三林村(91戸, 360人)は, 田37町2反余・畑43町5反余, 新上三林村(22戸, 91人)は, 田12町7反余・畑14町9反余とされている。
 38) 前掲37)。
 39) 前掲6), 6, 147頁。
 40) 前掲1), 7~23頁。
 41) 前掲3)。
 42) 一橋家領1を含む。

THE REGIONAL ACTIVATION IN THE PROTO-INDUSTRIALIZED PERIOD OF JAPAN (PART 3): THE CASE OF THE LOWEST ACTIVATION IN THE SETTLEMENTS WITH SCHOOLS IN GUNMA AND SAITAMA PREFECTURES

Masao TAMURA

Through the studies of regional development of Japanese industrialization, the author discussed the activation in the proto-industrial period under the assumption that industrialization and activation took place at the same time.

He has already published the following two articles: "The regional activation in the proto-industrial period of Japan (Part 1)—school fee and the number of teachers in Gunma and Saitama prefectures," *Annual Reports of Josai Graduate school of Economics*, 4, 1988, pp. 1-23, and "The regional activation in the proto-industrialized period of Japan (Part 2)—the case of the highest activation in the settlements with schools in Gunma and Saitama prefectures," *The Historical Geographic Review*, 32, 1990, pp. 1-23. In contrast with the latter article, this study analyzes the case of the lowest activation in the settlements with schools in Gunma and Saitama prefectures.

Two indices of activation were chosen: (1) the number of pupils per teacher and (2) school fee for one pupil. In the settlements with the highest activation, the first index is less than 45, while the second one is between 13 and 19 sen. In the cases with the lowest activation, by contrast, the first index is between 80 and 190, whereas the second one is between 0 and 3 sen. The number of settlements with the highest acti-

vation is 26 and that with the lowest one is also 26.

While the nucleus of the distribution of the most activated settlements was in the northern area, the core of the least activated settlements lie on the southern area. These phenomena indicate that the coexistence of the sericultural centers influenced the regional activation more than the proximity to the largest city (Tokyo).

Most activated settlements were formed densely as the domains of several fiefs. By contrast, the least activated settlements were scattered sporadically. As a result, there was only one Shognate domain in the most activated settlements, while seven Shognate domains, including that of the Hitotsubashi family, were included in the least activated settlements.

The distribution of *shizoku* families was limited within the most activated settlements. In Gunma prefecture, moreover, they belong to the upper class of the activated settlements. In other words, the existence of *shizoku* families contributed to the regional activation.

In Gunma prefecture, the most activated settlements paid more miscellaneous taxes than the least activated settlements. The places of the tax payment in the most activated settlements were in the central and western part, while those in the least activated settlements were in the northern part. These facts suggest the heavier traffic along Nakasendo than along Mikunikaido.

As for population movement, commoners excessively moved in Gunma prefecture, while commoners excessively moved out of Saitama prefecture. The population movement was more frequent in the most activated settlements than in the least ones. The *shizoku* population which move out of Saitama was larger than of Gunma.

More horses existed in the least activated settlements than in the most activated settlements. On the contrary, the distribution of carts and *jinrikishas* was mainly in the most activated settlements.